

# 労使研

労使関係研究協会  
〒105-0014  
東京都港区芝2-20-12  
友愛会館9階  
TEL:03-3453-5386  
FAX:03-3451-1710

関西支局  
〒550-0001  
大阪市西区土佐堀1-6-3  
JAM西日本会館内  
TEL:06-6225-2881

「情報」第62号 2022年9月

## 3年ぶりの開催 友愛会創立を記念する会



わが国近代的労働運動の源流である「友愛会（鈴木文治初代会長）」創立（大正元年8月1日）を記念し、8月1日に標記記念する会を2019年以来3年ぶりに規模縮小・着席形式で開催しました。

昨年と一昨年はコロナ禍の影響で記念パーティーを中止、日本労働会館関係者による小規模な「集い」の開催としました。今年は友愛会創立110周年にあたり、直前まで開催方法等について協議を重ね、立食パーティーをとりやめ規模縮小・着席での集会・研修の形で74人の参加を得、開催となりました。

## 主催者代表挨拶・高木剛会長

今年で友愛会創立110年。この2年、会を開催することができず、何人かの方からお叱りの声が私のほうへも届けられました。今年はまた第7波の最中とはいえ、通常より縮小した形ですが「友愛会創立を記念する会」の趣旨を体した会を持つことができましたこと、皆さんとともにこの会の意義をかみしめたいと存じます。

110年前のこの日本、明治が終わって大正へ。ちょうど大正デモクラシーの時期（1910年代～20年代）であったかと思えます。ある意味では昭和前半にいたる危なっかしい日本に向かう助走期のような時期に、友愛会は創立されました。

友愛会の運動論、哲学の多くは現在の連合へ引き継がれたと多くの方が思っておられますが、振り返ってみると自由、あるいは民主主義といった人類普遍の論理を大切にする労働運動をやっ、ワーカーズ・ファーストを標榜しながら労働組合主義を大切に運動をやっ、産業民主主義を大切にしながら切磋琢磨の労使関係をつくって健全な労働社会を作っ、あるいは国際的にも民主主義が貫徹される世界を作り、平和の概念を大切に世界を作ろうではないか。そんな理念をバックボーンにした友愛会の歴史の中の運動でした。

その友愛会の流れを汲んで現在の連合も今、いろいろな問題を抱えて芳野会長以下呻吟しておられます。二点だけ申し上げてみたいと思えます。

30年近く日本の賃金の伸びが停滞したままです。1997年、橋本内閣の時代、所得税・法人税減税を行わず、逆に消費税増税（3%→5%）を行いました。これをやったら必ずデフレになると、私たちは強くその時の政府に申し上げてきましたが、政府は増税に踏み込みました（結果は拓銀、三洋証券、山一証券が経営破綻に追い込まれ金融不安が発生）。以来デフレ時代となり、30年にわたって日本の賃金は停滞したままです。私自身も含めて今日の賃金の状況には忸怩たる思いがするところです。

そういう中で今まさに悪性インフレ、スタグフレーションがやってきております。賃金は皆様の努力で上がってはおりますが、インフレをフォローするようなレベルには達せず、勤労者家計は大変厳しい状況に陥っているのは、皆さんご承知の通りです。

こういう状況をどうしたらいいのか、何をなすべきか、特に連合は何をするんだと。労働組合は何しているんだと思っている組合員も多いのではないかと思います。今年から来年にかけての運動の中で、この状況を改善できるよう力を合わせてやっていただきたいと痛感します。



もう一つは今、非常に苦勞されている政治活動です。同盟を解散し、連合結成に歩を進めたとき、政権交代可能な政治体制を作ろうという先輩の思いが詰め込まれていました。今の野党は（まとまらず）いろいろ経緯があったかもしれませんが。職場の組合員にとって政治活動とは何なのか。組合員の皆さんに直接いろんな運動を働きかける職場の役員が大変苦勞しています。連合の政治活動、それにつながる政策制度要求実現活動がどうなっていくか、皆心配しています。

コロナ第7波、ロシアのウクライナ侵攻、インフレ、つい最近では安倍元総理暗殺…社会がどこかおかしくなっている中で日本を、労働者の毎日をどうしていくか。今こそ友愛会魂をもう一度思い起こして運動の前進を求めていかなければならないと思えます。





## 来賓祝辞

### 連合・芳野友子会長

友愛会110周年、おめでとうございます。110年間心血をそそぎ、命を懸けて労働運動を前進させてきた、その延長線上に現役の私たちがいるということを今、認識しております。

第26回参議院選挙、連合としては比例候補9名、選挙区では46名の推薦候補者を支援してきました。昨年10月の総選挙で支援政党が二つに分かれては現場が闘いにくいという反省を活かし、参議院選挙では支援政党を明記せず、連携という言葉にとどめ、人物重視、候補者本位の方針を立てました。地域で本当にご努力をいただきましたが、なかなか政党の連携が難しく、9月の中央執行委員会を目的に反省点を取りまとめています。

先程高木会長からもご指摘ありましたが、様々な立場、角度からの意見が出てくるのが、私たちにとっては現実を直視できる糧になると思っています。労働運動のボトムアップ活動を中心に進めていきたいという風に考えております。

昨年10月に私が連合会長になってから様々、マスコミに取り上げられることがあり、構成組織、加盟組合の人たちともたくさんお話をする中で感じたのは、連合、労働組合が今、現場の中で薄れてきているのではないかということです。連合の仕組みや、組織体系などを説明しないと、

(連合の考え方を)なかなか具体的なことまではご理解いただけない。

私たちは運動を前進させようとして、足元で起きていることが忘れがちになってしまう。もう一度そこで立ち止まって振り返る必要があるかなという風に考えています。

先日政府の「新しい資本主義」に基づいた計画が発表されました。連合が言い続けてきたことも取り上げられました。雇用形態間の格差そして男女間の賃金格差の是正の問題です。根底には雇用を守っていくことがあります。そしてあらゆる差別を解消していくことが一番重要だと思います。この課題について、これからは実効性を上る活動を進めていかなければならないと考えます。

連合の定期大会では、連合運動のすべてにジェンダー平等の点をいれていくと申し上げました。男性中心だった労働組合も今は多様性の時代になってきています。国際社会ではすでに女性参画率50%、そして若者も労働運動に取り入れていく取り組みが進んでいます。この世界の流れに沿い、現場に目を向けながら進めていきます。

愛会が作り上げてきた労働運動を、連合としてもしっかり受け止めながら、運動を前進させていきたいと考えています。

### 民社協会・小林正夫会長

友愛会創立110年を迎えるということで、お招きいただき本当にありがとうございます。

7月25日をもちまして3期18年務めました参議院議員を退任いたしました。長い間友愛会の皆様には大変お世話になったこと、改めて感謝を申し上げます。ありがとうございました。民社党の解党した後、民社協会という立場でこの活動を引き継ぎさせていただいております。

ILOに加盟しよう、最低賃金を上げていこう、1日8時間の労働条件を作っていこう。110年前に鈴木文治さんがスタートした時にこの目標が掲げられました。時代とともにいろいろ環境も変化しておりますけれども、やはり基本的な考え方、精神は変わっていません。

働き方改革という審議に私も参画いたしまして、いま新しい法律が施行されていますけれども、大事なことは私たちに健康で元気で働けるそれには長時間労働を解決しなければいけない。こういうことが大きな労働関係の一つのテーマでした。最近では勤務先が自宅である在宅勤務者の労働者性の判断についての報道もありました。これらは今後どのように判断されていくのか。



これも新しい労働条件になっていくかもしれません。先程鈴木文治さんたちががんばってつくられた友愛会の信念に基づいているんな対応が必要だなど、このように感じております。民社協会に戻りますけれども、民社協会としてはやはり国がやるべきことは外交と防衛、そして食糧とエネルギーの安全保障、加えて教育だと、思っております。正直今、コロナ禍で民社協会の総会も、人に来ていただいて総会が開けない状態が続いております。民社協会としてはこういう考えるんだということを、わかりやすく多くの方に発信していく必要がある、このような思いで、手続きを踏んでおります。

全国的にみると地方民社協会も少し減ってきている、これが正直なところですが、皆友愛会のこの精神をもって民社協会頑張っていこうという熱い信念があるということをお伝えします。

来年の統一地方選挙に私の後輩が、九州福岡で市議員に挑戦したいと。その心は友愛会の精神であると。彼は労働運動を勉強していますが、友愛会が掲げてきた理念と精神をもって、頑張っていきたい。また私たちが仲間であるという思いで立候補したいと言っています。具体敵な話が決まれば皆様にご支援をお願いすることになると思います。

そういう若者がいるということをお伝えしてお祝いの挨拶といたします。



## 政策研究フォーラム・谷藤悦史理事長



自由民主主義を日本に定着させ、発展させるうえで一番重要な第1期は大正デモクラシーです。1910年代のまさにこの友愛会の活動が、自由、民主主義の礎を作っていました。この出発がまさにユニテリアンの活動です。福沢諭吉が塾を作り、人材を作ってから30年。また一方、大隈重信は東京専門学校を作って、そこから安部磯雄などが出てきて、この運動を支えていく人材を育成するのに30年を要しました。人材育成によって、この労働運動あるいは民主主義運動が支えられ、1910年代から20年代にかけて第1次の大正デモクラシーが花開いたのです。

1920年代になってアジアで初めて国勢調査ができました。これがあったから選挙人名簿ができ、普通選挙が実施されます。それが1925年です。普通選挙のような運動を支えていったのが、まさにこの友愛会の運動の歴史であります。今日の日本の自由民主主義は、戦後にできたわけではなく、そういう先人たちの様々な努力が運動となってつくられてきました。

1990年代初めに、スタンフォード大学のフランシス・フクヤマと対談する機会がありました。その時彼は、歴史の終わり、といました。ベルリンの壁が崩壊して、20世紀は民主主義の時代で、力強い自由民主主義の勝利だと思ったわけです。それから30年、権威主義国家が台頭し、ウクライナ紛争が起きました。そして世界の国の中で、自由民主主義が信頼に足るのか、生活を豊かにするのか、と信頼が揺らいでいるわけでもあります。

日本における人材育成は貧困極まりない状態にあります。2020年における研究開発費、民間も公的資金も含めて、アメリカと中国は約60兆円です。対して日本は20兆円、三分の一です。公的投資はOECD39カ国の中で、日本は37番目です。GDPのわずか3、4%しかありません。このような状態の中で、人材の育成というものがなされていくのでしょうか。

こういう状況の中で、日本の将来の自由民主主義や産業や日本の経済を支えられる人材が生まれてくるのでしょうか。皆さん、そこに目を向けてください。

労働運動は皆さんだけに利益を還元するものではありません。産業全体の富を豊かにするための運動です。それは友愛会の精神の根本です。だから吉野作造と一緒に民主政治を作ろうとしていた。それが社会を豊かにし、運動を豊かにすると考えたからです。そういう伝統を私たちはさらに、しっかりとしたものにしなければならない、と思います。

原点に帰って日本の人材育成と産業構造の変革に、さらなる大きな努力を、皆さんからいただきたいと思います。それが強靱な自由民主主義を作って、同時に強靱なそして柔軟な日本社会を作り上げるということにつながっていくだろうと思います。

110年を心からお喜び申し上げますとともに、今後ともの皆様のご尽力を心からお願いする次第であります。本日はおめでとうございます。



会の冒頭では昨年亡くなられた9名の仲間を偲び、全員で黙とうを奉げました

## 記念講演（要旨） 間宮悠紀雄・友愛労働歴史館副館長

### 日本労働運動の110年 ―友愛会から連合へ―

1897年、片山潜、高野房太郎を中心に作られた労働組合期成会は、文字通り「労働組合をつくろう」というオルグ団によって結成され、日本の労働運動に曙をもたらしたが、今日は私たちの運動の源流となる友愛会について話をしたい。

友愛会は今から110年前の8月1日夜8時、当時この場所にあったユニテリアン教会でつくられたナショナルセンター。友愛会の特徴は、労働者の人格の向上を謳っているところにある。労働組合の目的は労働諸条件の維持向上、経済的地位の向上だけでなく、労働者の人格の向上を図るところに特徴がある。

協調会と澁澤栄一について。澁澤は日本の資本主義を作った人と言われるが、友愛会とも縁が深く、友愛会を全面的に支えた一人でもあった。

1915（大正4）年頃、アメリカで労働組合が中心となって移民排斥運動が起こり、日本人や中国人の低賃金労働者が対象になった。澁澤は日本から労働者の代表にアメリカへ行ってもらって、何らかの妥結の道を見出そうと考え、鈴木文治に依頼した。鈴木もアメリカの労働運動を勉強するチャンスとみて渡米、以降、渋沢との関係が続く。



しかし澁澤は1919年、労使協調で企業の発展をめざすという、「協調会」を作る。政府の肝いりで作られたもので、鈴木文治や友愛会は労使の馴れ合いはダメだと反対。澁澤もそうした批判が出ることはわかっていたので、最初の役員を全部更迭した。内務省の役人を連れてきたが、労働組合に理解のある、ゆくゆくは労働組合を法律で認めさせようという人物を連れてきたと言われる。友愛会は渋沢の改革を評価して、協調会ともつきあいをするようになった。後に中労委会館となった協調会の本部の会議室を借りて大会を開くなど。西尾末廣がその図書室にこもって本を読んでいと、当時協調会で働いていた大河内一男が書いている。

そして1921年、川崎三菱争議。日本労働運動史上最大の争議と言われ、3万5千人の労働者が参加。当時は関東より神戸・大阪を中心とした関西の方が労働者が多く、非常に力があつた。この争議の大きな意義のひとつは、多くの組合活動家を輩出したこと。多くの労働者が争議で解雇されて全国にちらばつた。東京、さらに埼玉へ出て、川口を中心に鉄工組合を組織したのが井堀繁雄。今のJAM、昔の全金同盟の会長となり、日本労働会館の理事長も務めた。戦後は国会議員にも。埼玉では生協運動で知られている。

総同盟は1925年に共産党系組合を除名、第一次分裂をおこす。総同盟は労働組合主義を採って活動してきたが、共産主義の影響下にあつた人たちが乗っ取り活動を始め、激しい争いとなつた。以降、労働組合主義のナショナルセンターと共産主義の労働運動が競合・分裂していき、いま連合と全労連が対立しているのは、1925年からずっと続いていること。共産主義はいつも少数派で、組織に入り込んで主導権を握って組合の執行部を乗っ取り、労働組合を自分たちの影響下におく。そういう共産系を除名したのが総同盟第一次分裂だ。

記憶にとどめていただきたいもうひとつは、昭和2~3年の野田醤油争議。会社側が地元の警察や県や内務省の役人と話をしたうえで労働組合を挑発したのだろう。松岡駒吉や西尾末廣など総同盟の幹部は争議に反対したが、当時の野田醤油の労組は日本最強の団結力を誇り、大正時代の争議を勝ち抜いた強い自信があつた。会社側の挑発にのって始まつたが争議団は追い詰められていき、最後は天皇陛下直訴事件をおこして終わる。この日本の労働運動史上唯一の直訴事件は、組合の副委員長が東京駅で天皇陛下を待ち受けて直訴しようとし、駅に近づいて捕まつた。副委員長は半年間刑務所へ。それだけ追い詰められた大変な争議だつた。この敗北で総同盟は現実的・建設的な労働運動へ方向転換をしていく。

1946年8月に総同盟は復活する。戦後の労働運動は、労働組合主義の総同盟と、共産党の影響下にある産別会議という2つの団体がスタート。産別会議が倍程いたが、共産党の指導下の産別会議の中で民主化運動が起こる。世界では国際自由労連ができて共産主義労働運動と対峙しており、日本でも共産党主導の労働運動は間違っているという声で、産別会議民主化運動となる。1950年に民主的労働運動を推進するという事で総評が誕生、国際自由労連加盟をめざした。総評結成に動いたのは友愛会・総同盟系の仲間で、当時の総評は日本の労働運動を総結集したような団体だつた。総同盟系も総評へ団体加盟しが、直後に総評は左旋回。その中心を担つたのが日教組と国労で、翌年の大会で国際自由労連加盟を否決、ナショナルセンターとして国際組織に加盟できなかった。そこは総評が最初から抱えていた限界だろう。

1950年は朝鮮戦争が起きて日本が戦争に巻き込まれるかというときだつた。民主化運動の結果できたものがわずか半年で左旋回し、反国際自由労連の立場をとつたのはなぜか、時代背景を見ないとわからない部分がある。

総評誕生の地はここで、ここに本部が置かれた。総評の一部の組合の人たちの過激な政治闘争主義や、国際労働運動に入らないローカルな労働運動に対する批判の声をうけ、総同盟系は集団脱退して総同盟を再建した。総評に残つた組合も4単産声明として批判の声をあげたがうまくいかず、うち3単産が飛び出して総同盟とともに1954年に全労を結成。

全労が直面した大きな争議が近江絹糸争議。日本の労働運動



史上画期的な人権争議だった。会社側が寄宿舎の女性組合員の手紙を勝手に開封したり、宗教を強制したりといった、労使関係以前の人権問題に立ち上がったのが、当時の全織同盟と全労。三島由紀夫が小説『絹と明察』で取り上げ、争議が有名になった。

三井三池争議は非常に特異な争議と言われ、旧同盟系と旧総評系の認識の違いがいちばん表れたと思う。旧総評の人たちと話すとき、三井三池になるとぎくしゃくする。「旧労」「新労」と言う私たち、向こうは「第二組合」。私たちからみれば、単なる合理化闘争でなく、九州という特殊な地域で向坂逸郎たちが主導して、シベリア帰りの暴れん坊たちが労働運動にあるまじきことをやった非常に特異な争議。全労は新しい組合を作ろうとする人たちから助けを求められて応援に行った。全労からもオルグ団がずいぶん泊まり込んだと聞いている。

1964年、全労から同盟へと発展する。全労は会議体で、同盟は目的と行動が一致する人たちでつくられた同盟体。今の連合は連合体で、目的と行動が必ずしも一致しなくとも成り立つ。他の組織の名にもそれが見える。中立労連は連絡会議。総評は総評議会で、県評、地区組織、全部が独立したゆるやかな協議会。同盟系の組織で総評にも入っていたところがある。

同盟は非常に強固な組織をもっていた。その良し悪しは判断できない。総評のようなゆるやかな形では国際組織に入るようなことはできない。総評加盟組合で民社党の候補者を応援する組合がいくつかあったが、総評はそれを除名することはしない。同盟は、そうではない。民主的なルールにしたがって決めたことにはしたがってもらおうというのがある。

同盟は組織を伸ばしていき、国民運動にも取り組み、産業政策や長期賃金計画、福祉ビジョンといったものを次々打ち出し、政策・制度要求に力を入れていった。後に連合に引き継がれる労働組合の政策・制度要求は、その頃の同盟から出てきたもの。同盟、総評、中立労連、新産別の労働4団体のなかで同盟は政策主導型の組織として着実な運動を進めていった。そのような運動と一体で歩んだのが、当時の民社党。1926（大正15）年にできた社会民衆党の流れを汲んでいるのが民社党。総同盟は社会民衆党、日本社会党、そして民社党を応援してきた。

1987年に民間連合、89年に官民統一連合ができて今の連合時代がスタートした。

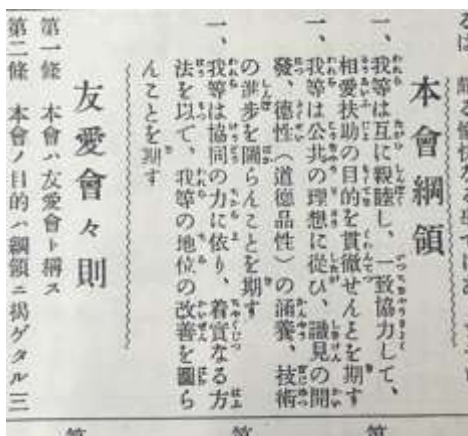
連合を水面下で支えた同盟・総評の継承団体が友愛会議と総評センターで、政治活動、とくに選挙、平和運動とか、核禁運動、学者のみなさんとのつきあいは、それぞれの継承団体が行った。水面下なので、そういった継承団体の動きは労働運動史には出てこない。

連合ができたときは「産別自決」で政治活動を行っていない。政党一党支持を決めると連合がまとまらない。そこで「産別自決」として旧同盟系が民社党、旧総評系が社会党を支持することは認める、となった。産別だけでは決まらないので昔からの仲間で集まってできたのが友愛会議、総評センターである。

1999年に当時の連合事務局長の笹森さんが「もう10年経った。連合に全部任せてくれないうか」と直談判し、総評の皆さんとも話した。それで友愛会議は解散し、政治活動は全部連合に任せます、その代わり政治局でなく旧同盟と旧総評を引き継げる何かを、というので連合の中に政治センターができた。そういう流れの中で、連合は新しい時代を進んでいる。

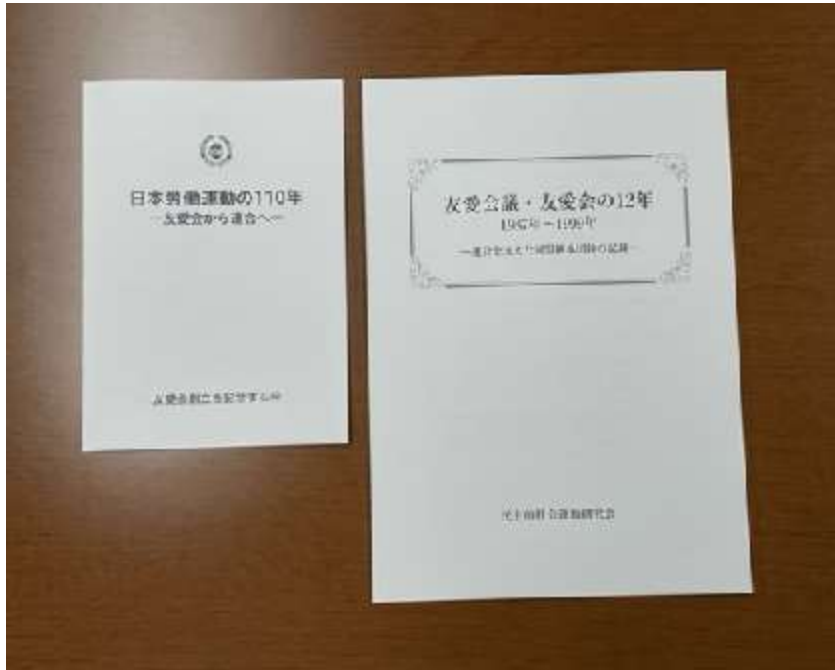
最後に、友愛会の綱領と、UAゼンセンの綱領。ここに書かれた「人格の向上と完成を図る」のが労働組合なのだということ、これが友愛組合の特徴である。労働諸条件の維持向上しかやらない組合、階級的革命的なことをやる組合、共済事業しかしない組合もある。そのなかで友愛組合、人格向上至上主義組合というタイプが、友愛会以来の労働運動、つまり私たちの流れの運動。友愛会・総同盟ができたときから110年、脈々と引き継がれている。現在ではUAゼンセンの綱領がこれを引き継いでいる。

友愛会から110年、必ずしも多数派ではなかったし、いま連合の中でも少数派かもしれないが、鈴木文治や友愛会が掲げた「人格の向上と完成」という流れは引き継がれているだろうというのが私の結論だ。



## 冊子頒布のお知らせ

友愛会創立を記念する会が本年の会場で配布した冊子『日本労働運動の110年 ―友愛会から連合へ―』を友愛労働歴史館グッズコーナーで頒布しています（1冊100円、数量限定）。また、冊子をお求めの方には間宮副館長の私家版記録集『友愛会議・友愛会の12年』もお譲りしています。来館時におたずねください。



## 友愛労働歴史館の活動

### 1. 展示会・講演会活動について

#### (1) 展示会活動

展示会活動は常設展と企画展を開催してきました。

常設展「日本労働運動の100年余-友愛会・総同盟(戦前)を中心とする」は、2022年8月1日オープン以来、原則同一内容で開催しています。「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」という格言から、労働運動の歴史は不変であるとの思いから常設展を開催しています。

企画展は、当会館で2021年3月8日～7月5日に企画展示した「鬣(たてがみ)を持つ男・西尾末廣―労働運動・政治運動に生きた生涯―」の再展示を、西尾末廣氏と縁の深い大阪で開催しました(2022年7月21日(木)～22日(金) JAM西日本会館 10:00～16:00)。

2日間の短期間開催でしたが、労使研、民社協会、各産別(加盟組合含む)組織関係者36名、大学教員など一般見学者7名、総員43名が来場しました。

戦前、大阪・関西を中心に友愛会・総同盟の労働運動に取り組んだ西尾末廣。戦後は日本社会党の結成を主導し、片山内閣の官房長官を務めます。逆境にあってもぶれない姿勢と風貌から西尾末廣は風雪の人、百折不撓の人、鬣(たてがみ)を持つ男と呼ばれました。自ら結党した日本社会党の容共・反米主義を批判した西尾末廣は、1960年民社党を結党するなどその姿勢は一貫して反共産主義・反全体主義でした。西尾末廣(1891.3.28～1981.10.3)の生誕130年、没後40年を記念して開催した企画展「鬣(たてがみ)を持つ男・西尾末廣―労働運動・政治運動に生きた生涯―」を、関係の深い関西・大阪で再展示したものです。



### 第1部 風雪の人・西尾末廣—1891年～1981年—

戦前期、友愛会・総同盟系の労働運動で活躍する一方、大正15年の社会民衆党にも参加し、日本で初めての無産政党出身政治家となった西尾末廣。戦後は日本社会党や民社党の結党を主導し、革新系を代表する政治家として生きた西尾末廣の90年の生涯を、写真や解説パネルで紹介しました。

### 第2部 百折不撓の人・西尾末廣—労働運動に生きて—

戦前期、友愛会・総同盟系労働運動は非法下で、国家権力の弾圧を受ける一方、共産主義者や無政府主義者との戦いにも翻弄されます。苦しい戦いの中、労働組合主義者・西尾末廣はぶれることなく己を貫き、百折不撓の人と呼ばれました。第2部は労働運動家・西尾末廣を紹介しました。

### 第3部 鬣（たてがみ）を持つ男・西尾末廣—政治運動に生きて—

戦後、政治運動へと軸足を移した西尾末廣は、日本社会党や民社党の結党を主導しています。冤罪事件などでも自らの主張を貫き通す姿勢と、その風貌から西尾末廣は鬣（たてがみ）を持つ男と呼ばれました。

第3部は政治家・西尾末廣について、写真や解説パネル、映像で紹介しました。

### 出張展示特別編 西尾末廣の足跡・大阪 徒弟から旋盤工、そして労働組合リーダーへ

大阪会場のみの特編として、製造の現場を移りながら旋盤工としての技術と社会感覚を磨き、労働運動に飛び込んで友愛会常任となるまでの足跡をパネルで紹介、同志に贈った掛軸・色紙等も展示しました。



## (2) 講演会活動

### ① 記念講演

例年は、企画展と連動させた講演会・労働講座を労使関係研究協会や友愛会創立を記念する会と共催もしくは単独で開催しています。今年も、友愛会創立を記念する会は、記念講演として、講師に友愛労働歴史館の副館長である間宮悠紀雄氏を招き、「日本労働運動の110年～友愛会から連合へ～」をテーマに講演を行いました（P5～7に要旨掲載）。

### ② 出張講演

今期から賛同会員の組織等からの講演依頼については積極的に受けています。コロナ禍で集団移動に懸念をする組織が多く、出張講演は好評を得ています。

1) UAゼンセン・フジグループ労働組合連合会トップセミナー・出張講演(藤吉館長)

6月16日(木) 演題「未来に向けた労働組合が果たすべき役割」で、労使関係の考え方と生産性運動の三原則～厳しい環境下における労使関係～を実施。生産性運動三原則の今日的な理解、あるべき労使関係は友愛会から同盟への発展の中にあり。32名参加。

2) UAゼンセン・専門店ユニオン連合会「2022年度労使懇談会」・出張講演(藤吉館長)

7月27日(水) 演題は「労使関係の考え方と生産性運動の三原則～厳しい環境下における労使関係～」。同盟的なコーポレートガバナンス(企業統治)の具体的なあり方、生産性運動三原則の今日的な理解、あるべき労使関係は友愛会から同盟への発展の中にあり。会社側24名、組合側37名の合計61名の参加。

3) UAゼンセン・流通部門・伝承塾「惟一塾」逢見直人塾長・出張講演(藤吉館長)

8月29日(月)～31日(水) 演題「次世代に期待すること」として、労働組合主義と労使関係の考え方、生産性運動の三原則とあるべき労使関係、労働組合の必須である政治活動、反自民非共産の思想。参加者合計16名

## 3. 資料の収集・管理作業、調査研究活動について

友愛労働歴史館は、年間を通して資料の収集を行っています。また、必要な調査・研究活動に取り組んでいます。

### (1) 資料の収集・管理

① 書籍「父の青春」 1冊 綿引喬也 様 2022年1月

② 書籍「河合榮治郎全集」 全23巻、別巻24冊 坂東正子 様 2022年2月

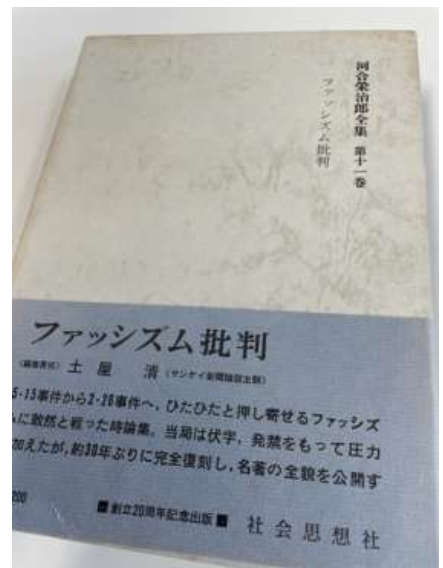
③ 書籍「戦時期日本の働く女たち ジェンダー平等な労働環境を目指して」 1冊  
新潟国際情報大学 国際情報学部国際文化学科 堀川祐里 様 2022年2月

④ 書籍「実録 生産性論争」 1冊 公益財団法人日本生産性本部 様 2022年4月

⑤ 書籍「港区史」通史編 近代(上)(下) 各1冊  
東京都港区 様 2022年5月

⑥ 写真「民社党関係」 三河谷 進 様 2022年7月

⑦ 書籍「自由の防人となって」1冊  
中村勝範先生・追悼事務局 様 2022年9月



## (2) 調査・研究活動

### ① 調査研究員会議

2月17日(木)、友愛労働歴史館展示室にて、9名が出席し開催されました。開会にあたり徳田館長より、日本労働会館の現状と友愛労働歴史館の今後のあり方について挨拶を受けました。報告事項として、①日本労働会館・三田会館の現状について②友愛労働史館2021年の活動について③歴史館の役員・調査研究員について。確認事項として、①新たな調査研究員の選任について、現友愛労働歴史館副館長の間宮悠紀雄氏が選任されました。②今後の活動について活発な意見交換がされました。

### ② 井堀繁雄研究会(梅澤昇平代表)

3月24日(木)、友愛労働歴史館書庫閲覧室にて、9名の出席をもって開催されました。本研究会は2018年に発足。井堀繁雄(労働運動家・政治家・協同組合運動家)の資料の収集・管理・研究に取り組んできました。

井堀繁雄は、1915年八幡製鐵所に勤め、1918年神戸川崎造船所の職工に転じ、1919年友愛会に加わり、1921年(大正10年)の川崎・三菱大争議に参加して検挙され、同時に解雇、6カ月投獄されました。そして日本労働学校を卒業した1925年に埼玉県・現在の草加市の大阪窯業に入社。その後、埼玉・川口を拠点に総同盟運動に取り組んでいます。また、社会民衆党埼玉県連書記長、同党中央委員、社会大衆党埼玉県連執行委員を歴任しました。

戦後、総同盟再建に加わり、日本労働組合総同盟副会長、全国金属産業労働組合同盟会長(現JAM)や日本労働会館の理事長を務めました。また政治家として、西尾末廣国務大臣秘書官、経済安定本部員など活躍した人物です。

研究会では、①井堀繁雄の生涯とその意義②井堀繁雄研究会について報告されました。



## (3) 情報発信・PR活動について

友愛労働歴史館は、インターネットを利用したメールレポート「友愛労働歴史館たより」の発信、ホームページでの情報提供・PRなどに取り組んでいます。また、研究者・学生等への相談対応、資料提供などに取り組んでいます。

### ① メールレポート「友愛労働歴史館たより」の発信

2022年1月から8月、172号～179号まで発信。2022年8月末現在のメールアドレス登録者は1319名。

友愛労働歴史館Eメールアドレス [yuairekishikan@rodokaikan.org](mailto:yuairekishikan@rodokaikan.org)

### ② 友愛労働歴史館ホームページ

友愛労働歴史館は情報提供用にホームページ <http://www.yuairekishikan.com> を開設し、随時更新しています。

### ③ 友愛労働歴史館・公式ツイッター、その他による発信

友愛労働歴史館は公式ツイッター(@yuairekishi1912)で情報発信しています。その他、当館常設展チラシ等を活用し、紙媒体でのPR活動も行っています。また、希望者へ当館紹介用スライド「ようこそ友愛労働歴史館へ」、常設展解説スライド「日本労働運動の00年余」などのデジタル情報を提供しています。



友愛労働歴史館ホームページ



## 日本労働遺産の認定について

友愛会館の敷地の一角にあり、一般財団法人日本労働会館が管理する①「日本労働運動発祥之地」石碑と②ユニテリアン教会・惟一館煉瓦塀跡がこのほど、「日本労働遺産」第一号に認定されました。

1月13日に開かれた日本労働ペンクラブ総会（山田計一代表、植木隆司事務局長）において認定されたもので、認定趣旨は「日本の近代的労働運動発祥の地に関する石碑と遺構」。認定された遺産は「日本労働運動発祥之地」石碑と、惟一館（初期労働会館）の煉瓦塀の一部と煉瓦です。当日は日本労働ペンクラブから日本労働会館（友愛労働歴史館館長）に「労働遺産」認定証と認定盾が贈呈されました。



石碑と惟一館煉瓦塀跡



贈呈を受けた認定記念盾

